

で、大工場が林立している。

入った所は、機関車の修理工場。働いている同胞たちも機械技術者が大半で、ソ連側収容所所長以下も、日本人工員の優秀な技術を認め、給与も良好であったとか。

また優秀者には金銭も支給されていたとのことであった。しかし、私のような者は雑役工であった。でも、この収容所での数カ月は、これまでのところの待遇と差があったために、身体も大分回復したように感ぜられた。

そのうち、ある夜、うれしい情報が流れた。ソ連要人が工場を視察したらしく「当収容所は全ソ連作業所中最高の成績である。帰還の命があれば第一次とする」と発表されたということであった。翌日からの工場内はダモイ一色となり、我々を喜ばせてくれた。

それから一週間ほどたったころ、明日列車に乗る準備をせよと、ソ連将校から言い渡された。翌日、広場に集合、検査を受け、乗車、列車は東に向かって走る。今度こそ間違いなく東へ向けて走っているのだ。だまされ続けて来たことが、今確かにダモイだ、幾日かの後、望望のナホトカに着いたのだ。

ナホトカでは、ソ連側発表では日本からの配給がないので、待機するようということである。この二年間気長さを養われたような毎日であったが、ここでも待たされた一か月はまた長かった。やっと乗船することができた。乗船後三日目、舞鶴港への入港である。しかし私にとっては入隊後、七年ぶりに見る故国、舞鶴港のそれはそれは美しい景色であった。時に昭和二十二年五月九日、第一大拓丸、忘れようとしても忘れることのできないシベリア、そして彼の地に眠れる多くの戦友たちから合掌して、今七十歳を迎える私である。

ああ舞鶴港

和歌山県 稲葉 武男

“母は来ましたが、今日も来た、この岸壁に今日も来た、届かぬ願いと知りながら、もしや、もしや、もしや、もしやにひかされて”

二葉ゆり子さんの哀恋の唄である。吉田正さんの異国

の丘とともに、シベリア引揚者にとって忘れることのできない、肺腑をえぐる歌詞である。

去る年の十月二十七日、三尾老人クラブの一泊二日の旅行で、私にとって母港ともいべきこの地へ観光旅行をした。引揚記念館には、あるわあるわ、過ぎし日の自分の姿を目のあたりに見ると、おんぼろ防寒服を着て零下三十有余度、酷寒のあのシベリアのツンドラ地帯で、伐採に建築にとノルマをかせられ、ピストラ（早く）ダバイ（行け）と追い立てられながらの重労働の作業をやらされた、あの姿。私はぐうーと胸がつまって、涙の出てくるのをやっところえた。他の人たちは楽しい観光旅行である。さしたる感動もあるまいと思う。シベリア帰りは一行中私一人である。この稿を書きながらも手先がふるえる。

それほどまでにシベリア抑留とは過酷なものであった。奴隷という言葉はあるが、私たちは虫けらの存在であった。私の引揚船“永録丸”の写真、時鐘も置いてあった。平棧橋は帰国者にとって夢にまで見た祖国への第一歩をしるした所である。

拙文ながら、私の著書シベリア抑留回顧録の引揚時の一部を次に紹介させていただくことにする。

時、昭和二十二年七月六日である。青い海に黒くて大きな汽船が停泊している。船尾には白地で“永録丸”と染め抜いてある。五千トンの貨客船だが、そのときの私たちの目には永録丸が他のどんな豪華船よりも立派に映った。

私達の信頼に応えるべく、船はのんびりのどかに浮かんでいた。乗船してからのみんなは思ったより静かだ。祖国に帰るということは内心だれでもうれしい。しかし今なおシベリア奥地で苦役に従事している幾十万の戦友を偲んでいるのである。

それに寂しいかな、私たちは凱旋兵士ではない。復員者である。日の丸の旗を振ってもらい、ご苦労さん、しっかり頼むと励まされ、故郷を離れた遠い昔、まさかこんなみじめな姿で返ってこようとは思わなかった。国家のために私たちは健気にも死を覚悟して壮途についた。そして、心の片隅に万一晴れて帰還するときの

情景を描き続けてきた。その情景とは、まさか栄養失調の体に、おんぼろ服ではなかった。

船中の給食は麦のおかゆだった。うまい、実にうまい。こんなうまい食物がこの世にあることは忘れていた私たちである。コウリヤンのおかゆが常食であったからだ。煙草もバット十本支給された。(シベリアでは煙草の支給はなかった) 幾年ぶりに吸う祖国日本の煙草の味のうまさ、懐しさ、指先が焼けてくるのも知らずに吸った。

明日は日本へ到着するというので、八日の晩は寝られなかった。祖国に帰ることがうれしいのだが、たれ一人として帰ってからのことを口に出す者もない。みんなは未知の敗戦国日本の現状を想像して憂いているのである。

帰ったところで父母は無事でいるだろうか。妻子は、自分の仕事場は残されているだろうか……等々心配で口に出すのが恐ろしいのだ。

「見えたぞー」重苦しい一夜が、この言葉で一瞬のうちにふっ飛んだ。毛布で弱々しい未明の光をはねのけ、

私たちは飛び起きた。甲板へ出ると、先ほど叫んだ男は私たちを振り返り、もう一度「見えたぞー」と海の向こうを指して叫んだ。男の瞳には涙があふれ、声はふるえて聞きとりにくかった。甲板のレールにすがりついて、私たちは男の指さす方を首を伸ばしてにらんだ。未明の空の彼方には黒雲が連なっているだけである。だが、その男はその雲を指さして泣いているのだ。私はその男が間違えているのかと思ったが、そうではなかった。よく見るとそれはまぎれもなく祖国の稜線であった。

最初のうちは真っ黒に見えた。それもだんだん明るくなるにつれて、緑色が鮮やかによりがえってきた、太陽が、その稜線から顔をのぞかせたとき、だれからともなく「わあー」と歓声があがり、私たちは互いに抱き合った。そのほおには、ぼうだとして涙がつたわっていた。